

レッシングにおける寛容の理念

宮野悦義

一

レッシングの晩年の戯曲「賢者ナータン（一七七九）」が、宗教的寛容の精神を基調とした作品であることはよく知られている。寛容の問題が当時の、つまり啓蒙主義の時代の重要な論点であったことは言うまでもないが、イギリスやフランスの場合とは異なり、ドイツ啓蒙主義における寛容論の展開は、この国の社会的遅れを反映して独特の様相を呈しているように思われる。この「賢者ナータン」という戯曲が、寛容の問題と真向から取り組んだ、ドイツにおける殆んど唯一の著述であるという事実が、既にそのことを示してくれる。そもそもドイツの場合、寛容論の根拠となるべき近代的市民層の発展が欠如していた。宗教改革とそれに続く三十年戦争の結果、信教の問題に関する一応の和議が成立し、いわゆる領邦国家が固定してしまったために、近代的国家への脱皮が遅れ、従って宗教的自由の問題が市民的自由の拡大に裏打ちされていなかったのである。それに加えて、「小型絶対主義」体制内部に中途半端な寛

容の思想が時として加わる——フリードリヒ二世は宗教の問題に関して極めて無関心だった——といった事情もあって、ことの成り行きを一層複雑なものにしていた。結論めいた表現をすれば、ドイツにおける寛容論は、社会的背景から切り離された純粹にイデオロギー的な空間の中で展開されるのである。（「賢者ナータン」の素材や構成にもそれが明らかである。）これは、ドイツ啓蒙主義全般の特質であって、寛容の問題に限らない。従って、レッシングのようなすぐれた思想家は、ドイツの現実を超えて英仏の同時代の思想に、あるいは過去のすぐれた遺産と結合することによってのみ、正しい方向を見失う危険を回避することができたのであった。勿論、さまざまな限界を伴わずにはいなかったが、理論的深化がかえって容易に行なわれるといった長所を同時に持っていた。「賢者ナータン」から「人類の教育（一七八〇）」、そしてヘルダーの歴史哲学に至るドイツ啓蒙主義の歩みは、その長所を十二分に示していると言えよう。

二

一般的に言って寛容には二種類のものが考えられる。形式的寛容と内容的寛容である。前者は単に他の宗教、宗教的行為を放置することであり、裏返せば、信仰の自由と普通呼ばれるものに結合する。内容的寛容は一步進んで、他の宗教を積極的に認容し、自己の宗教以外にも「聖なるものとの出会い（G. Meier-schling）」の可能性を承認することである。政治的社会的背

景を伴なわぬレッシングの寛容論の場合、後者の意味での寛容論にまで進むことは当然である。形式から内容へ、そしてその内容的寛容論の理論的根拠をどこに求めるか、これがレッシングの最大の関心事だった。言葉を変えれば、宗教の多様性の承認、単なる漠然たる承認の段階から、何らかの単一性の原理による承認が問題だったのである。結果は別として、このような態度は弁神論につながるわけだから、宗教否定の思想まで容認するものではない。レッシングの寛容論が無神論に対して限界を持つのは当然である。啓蒙主義全般についても同じことが言える。そこでの、多宗教の積極的容認の原理は「自然宗教」であった。つまり、あらゆる既存宗教の背後に隠されている自然的な理性宗教、一切の宗教がその分派もしくは異端であるような、普遍的宗教が単一性の原理となる。この自然宗教の出発点、理性と啓示の関係の考察にあることは言うまでもない。レッシングも同じようにこの問題に取り組んでいる。と同時に、彼の寛容論を支えるもう一つの原理として、極めて倫理的傾向の強い「人道主義」がある。単純に割切ってしまうと、レッシングの場合、形式的寛容論とこの倫理的人道主義が、内容的寛容論と自然宗教（ただし、レッシング独自の解釈による自然宗教）とが対応する。更に、前者と「賢者ナータン」、後者と「人類の教育」が対応することになるのだが、もちろん、両者は部分的に重なり合っていて、必ずしも図式的には行かない。以下、この二つの作品に簡単に触れて、レッシングの寛容論を支える二本の柱を指摘したいと思う。

三

レッシングは「賢者ナータン」の序文で次のように述べている。

「すべての既存宗教に対するナータンの考えは、ずっと以前から私自身のものだった。(Lessings Werke, 2 Bde. Bd. 1, S. 770)」

晩年のレッシングの神学論争——頑固な正統派信仰の無理解に対する闘争——は熾烈を極め、ついに彼は執筆を禁じられるところまで追いこまれるのだが、この引用で明らかのように、「賢者ナータン」は劇形式による彼の反論であり、そしてユダヤ商人ナータンが、彼の宗教観の代弁者となる訳である。さて、劇中でナータンは、かたくなな聖堂騎士にこう語りかける。

「キリスト教徒だのユダヤ教徒だのは、人間であるより先に、キリスト教徒でありユダヤ教徒であるのでしょうか？ ああ！ 私があなたのなかに、一個の人間と呼びさえすれば十分な人をまた一人見出したのなら！ (ibid., S. 676)」

ナータン・レッシングの寛容論の根拠の一つが、この僅かな言葉で明確に示されている。宗教の区別は問題ではない。何よりも先ず、「善良な人間」、「どんな国にでも生れる善良な人間」が、些細なことで「難癖をつけ合わずに仲良くすること」が肝要なのであり、「一本の梢が、自分ばかりはこの地から生えたのではないなどと、思い上ったりしなければ (ibid., S. 675)」

それでいい、というのである。ここに、既成宗教の権威という枠にとらわれない、自由な個人の自覚がうかがわれる。レッシングにとって、宗教とはもはや外面的なものではなく、内的なもの、個人が主體的に把えて行くものとなる。と同時に、あるいはそれ以上に、教義ではなく愛のうちにこそ宗教の本質の存することが強調される。キリスト教に関して、彼は、「キリスト教の宗教」と「キリスト教」とは本質的に違うものであって (ibid., 1126) 前者は寛容を要求する愛のうちに成り立つ、と彼は述べているが、「賢者ナータン」においてもこうした人道主義的立場の方が強く前面に出て来る。第三幕七場の有名な「指輪の寓話」で、三人の息子たち (三つの宗教) を前に、裁判官は次のように言う。

「さあ、みんなそれぞれに、先入観にとらわれない、清らかな愛を求めて励むがよい。自分の指輪の宝石の力を發揮するよう、みんなで競い合うがいい。その力を、寛大とか、心からの強調とか、善行とか、衷心からの神への帰依とかをもつて、助けるように努めるのだ。その宝石の力が、もしもおまえたちの子孫の代にあらわれたら、わしは、幾千年もの後にふたたびおまえたちが、この裁判官席の前に立つようにすすめる。その時には、わしよりも賢い男が坐っていて、判決を下すであらう。」 (ibid., s. 703)

理性の名のもとに既成宗教の不合理・非寛容が非難されるのではなく、むしろ、宗教の本質を人類愛の実践という人道主義的な立場でとらえたということ、理性による宗教の解体ではなく、

く、宗教の本質的なものを救い出そうとする態度がうかがわれるということ、これがレッシングの寛容論の第一の特徴であった。そして、これが第二のものへの道を可能にした。宗教の本質を救い出そうとする態度は、必然的に個々の宗教の本源的な姿を求める歴史的考察を伴ない、啓示と理性の対立を流動的に把握することを可能にしたのである。この、一見して消極的な宗教観が、実は啓蒙主義における哲学と神学の論争に終止符を打ち、新しい分野を開拓する転機となる。

四

レッシングの晩年の論争の直接の相手が、ゲーツェに代表される正統派信仰であることは前に触れた。レッシングは「反ゲーツェ論」と「賢者ナータン」によって、これに一撃を加えたのであったが、彼は同時に、もう一つの敵を感じていた。彼は弟にあてた手紙の中で次のように述べている。

「正統派に関しては、ありがたいことに、かなりのところまでやった。正統派と哲学との間には壁ができ、その内側で、それぞれが他を妨げることなく各々の道を歩むことができたのだ。ところが今、何がなされようとしているのか。この壁を引き倒し、われわれを理性的キリスト教徒にするという口実のもとに、最高に非理性的な哲学者にするのだ。お願いだ、この点に正確に焦点をしばらく、新しい哲学者たちが投げ捨てたものよりも、その代りに据えようとしているものに注目して欲しいのだ。古い宗教体系が誤りだということについては、われわれの

意見は一致しているのだが。(一七七四、二、二)

レッシングがここで批判しているのは、ドイツにおける神学的革新者たち、「新教義派」の名で呼ばれる一派である。レッシングの場合と同じく、彼らもまた啓示宗教と理性との関係を明らかにすべく、この問題に取り組む。彼らは、啓示宗教に含まれる反理性的性格を、教義史の研究を通じて次々に除去し、ついには、啓示は人間の理性認識になら新しいものを付加しなかった、として啓示の概念そのものを否定するに至る。しかし、レッシングは彼らのせつかちな合理主義に組しなかった。中途までは同じ道を歩むのだが、彼らの批判の武器である普遍的理性、彼らが到達した理性宗教という抽象的理念に、彼は素直について行けなかったのである。レッシングのすぐれた歴史感覚が、それを彼に許さなかったと言えよう。また、当時のドイツの状況からしても、啓示宗教のもつ教化的役割を単純に放棄することは危険だった。同じ手紙の中で、レッシングは更に次のように書いている。

「もうとく使用に堪えぬものとなった汚れた水を、私は捨てずにとっておこうとは思わない。ただ、どこから淨い水を得るかが分らぬうちに、その水を流してしまいたくないだけだ。後で、肥溜めの中で赤ん坊に産湯をつかうことになるかも知れないというのに、何も考えずにその水を流すことに反対なのだ。われらが最新流行の神学と正統派との関係は、肥溜めと汚れた水の関係と、どれほど違っているというのか。」

かくして、レッシングは啓示宗教と理性宗教との間に、いわ

ば第三の道を、「淨らかな水」を求めるための道を自ら切り開く必要に迫られるわけである。彼は、一方で宗教の歴史的現実性を、時間・空間的な存在を認め、他方、宗教の普遍的・理性的性格をも、積極的に承認せねばならない。個別的・一回的な啓示の真理と、永遠にして普遍的な理性真理との融合をはからねばならないことになる。「人類の教育」に展開される思想は、この難問に対するレッシングの解答である。彼はここで、宗教的啓示を人類の教育の手段と見なし、人間理性の発展段階と旧約・新約の啓示を対応させる。正統派的信仰にとっては永遠の真理である啓示も、また「新教義派」の武器であった普遍的理性も、共に歴史的生成の流れの中に身を任せることになるのである。

「啓示が行なわれたとき、それはもちろん理性にとっての真理ではなかった。しかし、啓示は行なわれ、そして理性にとっての真理になったのである。それは、いわば算数の教師が生徒たちに予め示す計算の答のようなもので、生徒たちは後で計算し、いくらか訂正することもあり得る。もし、予め示された答に満足だとすると、彼らは計算の仕方を覚えないうえ、十分に彼らの作業に導きの糸を与えたすぐれた教師の意図は、十分に満たされぬことになる。(Ibid., Bd. 1, S. 1028)」

「啓示真理から理性真理へ」という彼の公式は、啓蒙主義の自然宗教とは対照的な歩みを意味している。根源的な自然宗教＝理性宗教という普遍的なものから、歴史上の諸宗教という特殊形式、つまり非理性的な退化した宗教に向うのではなくて、

逆に、未来にある理性宗教に向うとされるからである。その発展の過程が「完成の時代 (ibid., S. 1030)」への道程である以上、宗教の持つ歴史的な特殊形式は、多少誤りのある「計算」であろうとも、究極の目標達成には十分その役割りを果たしていることになる。レッシングのこの最後の段階には、宗教哲學的なヴェールを被ってはいらるものの、すでに啓蒙主義を超えた新しい時代の息吹きが感ぜられる。

さて、このような発展のイデオが、宗教的寛容に通ずるものであることはいうまでもない。歴史上の個々の宗教は、前に述べたように必要なものであった。しかし、それは同時に、歴史的に相対化される。個々の宗教は相対的な意義と限られた時間をもつものに過ぎなくなるからである。キリスト教もまた、決して人類発展の最終段階に対応するものではないのだから。「賢者ナータン」に力強く表現された人道主義的寛容論、ここに展開された彼の宗教哲學の総決算から必然的に帰結する寛容論、いずれもいわば社会的背景を欠いて理念的把握に止まらざ

るを得なかったとはいえ、啓蒙主義における寛容論の最高の段階に辿りついているのである。

主な文献

- Lessing, G. E., Gesammelte Werke, 2 Bde.
Mehring, F., Lessing Legende
Mensching, G., Toleranz u. Wahrheit in der Religion
Strudtmann, A., Lessings Leben
Hazard, P., European Thought in the Eighteenth Century
Müller, J., Wirklichkeit u. Klassik

註

① ヲイドロをはじめとするフランス啓蒙主義との関係、また、スピノザやライブニッツの思想の影響についての考察は別の機会に譲りたいと思う。本論ではレッシングの寛容論の根拠を指摘するにとどめた。

(一橋大学非常勤講師)